

賞 次席

課題（テーマ） いのちと向き合う

「死から逃げると、無理なのかな？」 上海文来高等学校 2年 金城健

命とは、一体どんな物なのでしょう？生まれて、最後は無くなってしまふ。そうです、世間のすべての物は必ず無くなる。人間もその理屈から逃げる事はできません。誰だって「死ぬ」という運命を、生まれてからずっと背負っているのです。だから、私たちは、いつか必ず「死」と、つまり自分の「命」と向き合わなければなりません。

ところが、生まれる、生きる、死ぬ、それらは同じ命の一部だというのに、人間は死を、もっとも怖がります。中国の有名な人物、始皇帝は数えきれない戦争を経験したのに、死ぬのが怖くて、不老不死の薬をずっと探し求めていました。人間はみんなそうです。いくら偉くて、勇気があっても、死を怖がらない人はいません。原因はたくさんあると思います。肉体的な苦痛への恐怖とか、死んだ後、どうなるかの心配とか、あるいは大切な人に二度と会えない悲しさなど。でも、私はもっとも重要な理由は、自分という存在がなくなるということだと思います。生きてさえいれば、生活がどんなに困難でも、自分の意志で変えようとする事ができる。例えば、今回テストがダメでも、精一杯がんばって、今度はやり返せばいい。恋人にふられても、もっと自分の魅力を増やし、運命の人に出会う可能性を増やせばいい。可能性はゼロではないだろう。つまり生きてさえいれば可能性は消えません。自分の存在は消えません。でも私たちは死を怖がる。自分が消えて行って、好きな物や人を、すべて忘れてしまうことを。二度と明日の太陽を見られなくなることを、一番怖がっているのです。

そこで、私は思いました。どうせ死から逃げられないし、怖がっても何も変わらないなら、いつそ詩を受け入れて、どうすれば心地良い死に方ができるかを考えたほうが、ましじゃないか。その方法はたくさんあり、人それぞれ、きっと自分にいちばん適当な方法があります。ここで私は、自分が思いついた方法を紹介します。一つ目はなるべく幸せな人生を歩むことです。幸せのかたちはたくさんありますが、友だちはなくてはならない存在だと思います。人間が自分一人で一生過ごすのは、幸せではなく、生きていくだけでもかなり困難なことだと思います。親友がたくさんいるなら、きっと幸せでしょう。友だちとのコミュニケーションや活動によって、人間は自分の気持ちを他人に伝えることができるし、逆に受け入れることもできます。そのことは、時には楽しく、時には厳しく争いがあることもあるでしょう。その気持ちと気持ちのぶつかり合いが、人に幸福感を与えてくれると思います。しかし、友だちを作るためだからと言って、無理やり気が合わない人を受け入れる必要はありません。なぜなら、自分を満足させることは、とても大事なことからです。人に対しても物に対しても同じです。気にいらぬ人と、無理して付き合ったり、いつまでも気持ちや欲望を発散させないで心に抑えていると、ストレスが貯まったり、なお悪い場合は、うつ病などの病気になることもあります。こんな状態で死を迎えるのはあまりにも残酷なことだと思います。映画<<タイタニック>>のあるシーンにも、船が沈

む事を知った貴族は最後まで豪華な服を着て、ワインを味わいながら死を迎えました。その時の彼は死と向き合う事ができたと言えるでしょう。怖がらず、平然と死を受け入れ、幸せな状態で死を迎える、それが人間としての最後の誇りです。幸せな死は人間の一つの巨大な恐怖を抑えることができます。それは、無限です。人間は無限のものが怖い。死んだ後、苦痛が無限に続くのが怖い。でも幸せが無限に続くのはそんなに悪いことではありません。だから幸せな人生を歩んで、悔いのない死を迎えるなら、苦痛ではなく、幸せが永遠に続くサブリミナル効果を与えてくれると思います。

その次に言いたい方法は、人間が最も怖いこと、つまり自分という存在がなくなるということについて、どうしたらその恐怖を乗り越えられるのかという方法です。私たちは死から逃げることもできません。自分の意志を保存することもできません。でも人に自分のことを覚えてもらうことは可能です。自分の存在が消えても生きていた時、言った言葉、したことや作った物は消えません。ボクサーのモハメドアリは死にました。でも彼が戦った映像、私たちにくれた感動は死にません。マイケルジャクソンは死にました。でも彼の歌は今でもたくさんの人に聞かれています。彼が輝いた過去も死にません。多くの科学者はみんな死にました。でも彼たちがいたからこそ、人間社会は進歩し続けました。彼たちの理論、発明は死にません。凡人である私たちも同じように、人に覚えてもらうことはできます。それは今まで生きてきたみんながずっとしてきたことです。子どもを産み、自分の意志を子どもに託す、自分の血が子どもの体内で流れ続く。そして、その子どももまた新しい命を産み、代々続いて、自分がかつて存在していた証になります。もちろん、人に覚えてもらう方法もひとつだけではありません。写真を撮るのも良い方法です。生活の中で、コツコツ努力したこと、自分が残した様々な足跡を記録するのも素敵なことです。でも、それら以外にも私たちが普段やりたくでも気がつかないことがあります。それは助け合うことです。確かに困った人がいたとき、無視をしても違法にはなりません。でも、勇気を出して、少しでも支えてあげるなら、その人の一生を変えるかもしれません。もっと大事なのは助けてあげた自分もいつか死と向き合わなければならないときに、かつて他人を助けたことを思い出し、心がホッとすることもできません。だから私は人を助けるのは自分を助けるのと等しいことだと思います。自分の命と向き合うことは、人の命と向き合うことと密接に関係していて、とても大事なことだと私は思います。

この二つの方法は私自身が思っている方法です。みんなに通用する方法ではないかもしれませんが。でも大事なのは、自分なりの「死と向き合う方法」を探したほうが良いということです。「死」も「命」の一部です。恐ろしいけど、誰でもいつかは向き合わなければならないことです。もし死が本当にやってきたとき、どう向き合うかを真剣に考えておかないと、その恐ろしさは想像に難くないのではありませんか。

命と向き合うということを考えていたら、私はますます自分の命の貴重さを感じました。なぜなら、死は人生に一度だけの大事な経験だからです。それなら、そんな大事なことに責任を取らないといけないと思います。以前こんなことわざを聞いたことがあります。「命には二回目は無い。でも一回しかない人生をうまく歩めない人間がたくさんいる。」つまらない人生なんて死に対して失礼ではないか？輝いて、幸せな人生と向きあうべきではない

でしょうか。それが「いのちと向き合う」ということだと思います。私たちの人生は、楽しいときがあつて、苦しい時もある。始まりがあつて、終わりもある。でも終わりがあるからこそ、私たちはもっとがんばって、輝く人生を生きようとするのではないのでしょうか。なにしろ私たちは今後も向き合わなければなりません、楽しくて恐ろしくて、複雑な命と。